財団法人松江市教育文化振興事業団

埋蔵文化財課年報Ⅵ

平成13年度

財団法人　松江市教育文化振興事業団

表紙写真：田和山遺跡群航空写真

目　　次

第１章　財団法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織 …… 2

第２章　発掘調査 …… 4

奥山古墳群 …… 6

大坪遺跡 …… 10

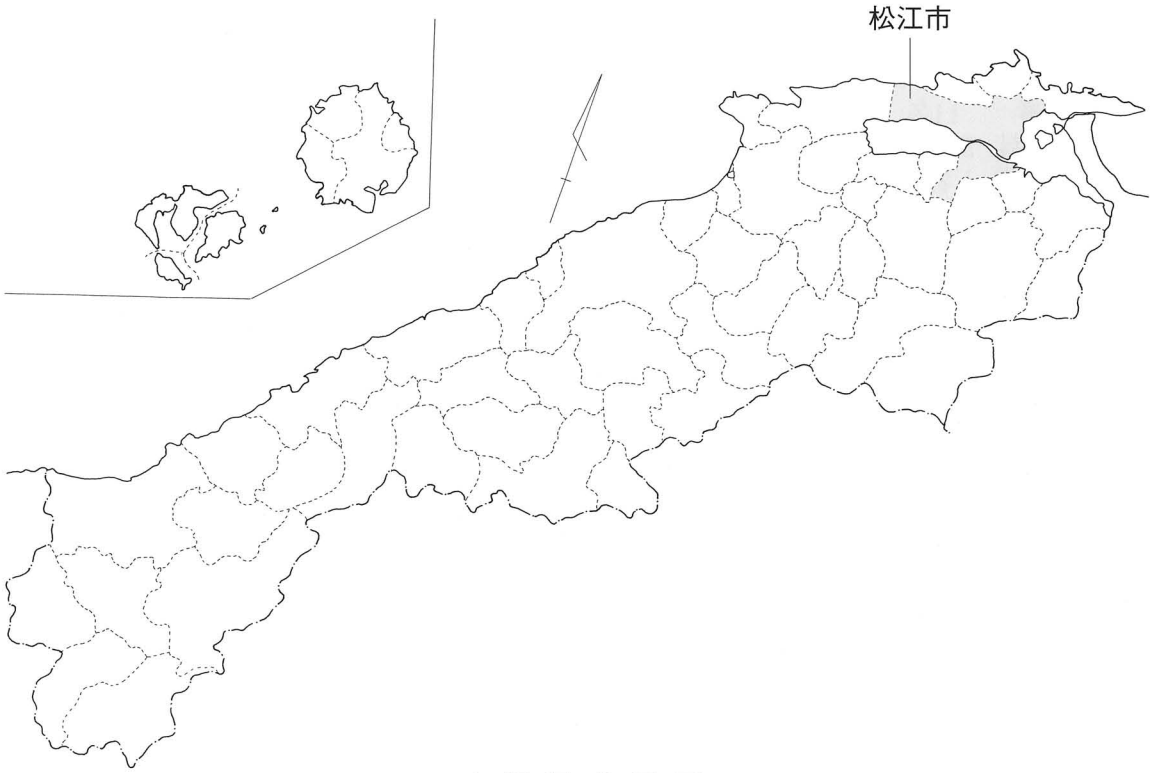
荒隈城跡（小十太郎地区） …… 12

法吉遺跡 …… 14

山津窯跡 …… 16

田和山遺跡群 …… 18

第３章　平成13年度以前の調査 …… 22



島根県位置図

第１章　財団法人松江市教育文化振興事業団の沿革と組織

◇　設　立　　昭和51年（1976年）４月１日

◇　所在地　　島根県松江市学園南１丁目21番１号（平成10年11月住居表示変更）

◇　目　的　　事業団は松江市及び松江市教育委員会の基本的施策に即応して、その委託を受けた事業及び市内の教育・文化・スポーツの振興に関する事業を行い、もって市政の発展と市民の福祉向上に寄与することを目的とする。

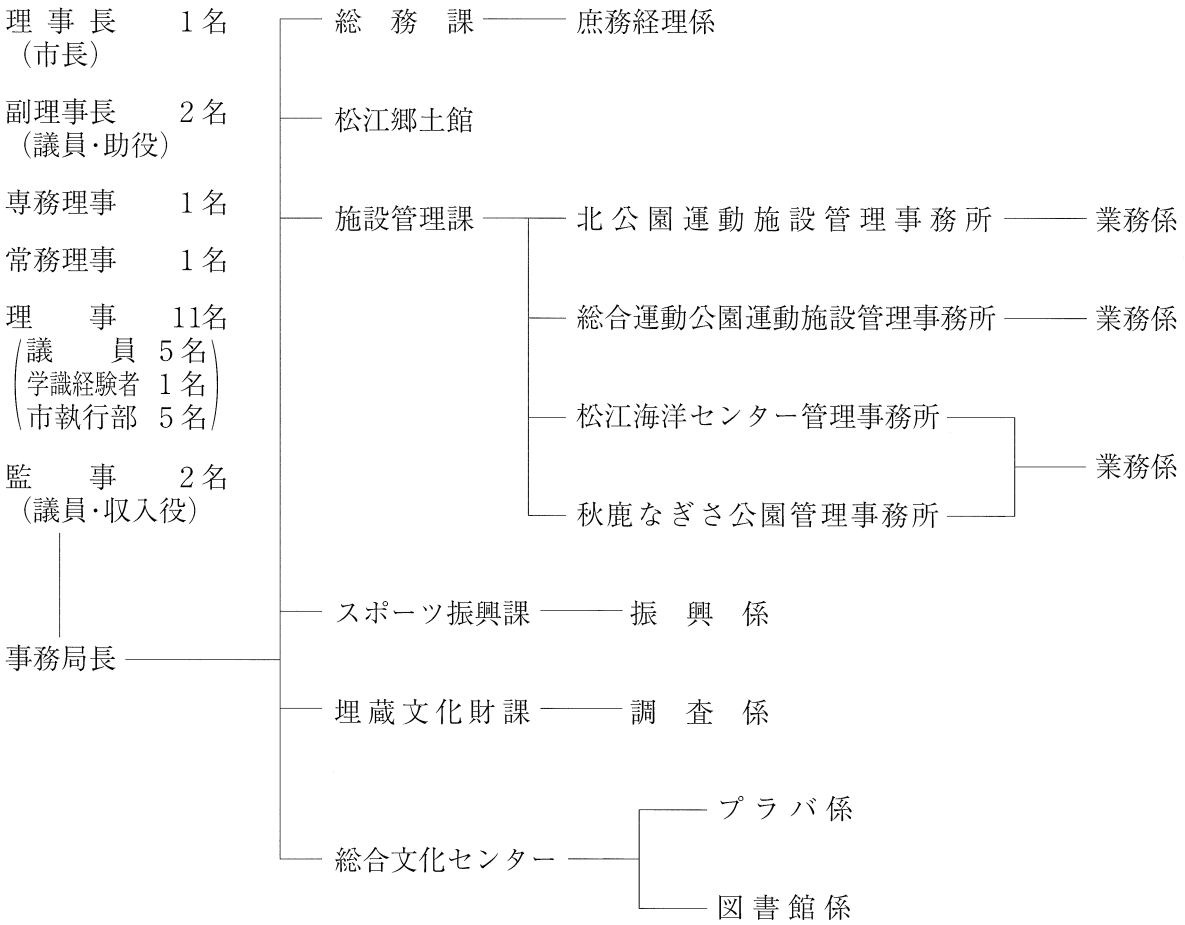
◇　事　業　　目的を達成するため次の事業を行う。

(1)　松江市及び松江市教育委員会から委託を受けた教育・文化・スポーツ等に関する施設の管理運営。

(2)　教育・文化・スポーツの振興に必要な事業。

(3)　その他、事業団の目的を達成するため必要な事業。

◇　組　織



◆ 埋蔵文化財課

■ 設　立　　平成５年７月１日

■ 所在地　　松江市母衣町180－21番地

■ ＴＥＬ　　0852－28－2065

■ ＦＡＸ　　0852－28－2038

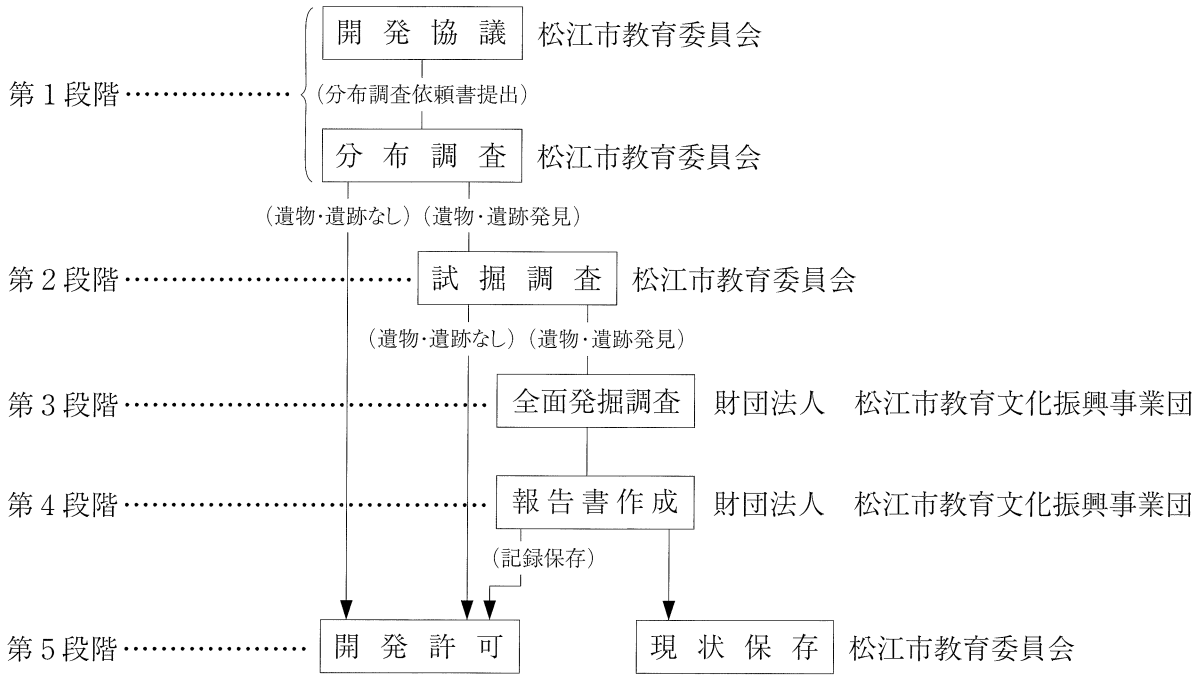
■ 業　務　　１）埋蔵文化財の発掘調査に関すること。

２）埋蔵文化財課の庶務経理（予算及び決算を含む）に関すること。

◆ 平成13年度調査職員体制（平成14年３月31日現在）

理 事 長	松浦　正敬
専務理事	米田　喜雄
常務理事	福井　勝美
事務局長	吉岡　正夫
埋蔵文化財課課長	事務局長兼務
調査係長（調査員）	瀬古　諒子
主　　任	曽田　　健
主　　任（調査員）	江川　幸子
主　　事（調査員）	石川　　崇・落合　昭久・藤原　　哲
嘱託職員（調査補助員）	廣濱　貴子・広江光洋・青山悦郎
	勝部　文生（平成13年９月まで）
	金坂　有史・野津　里佳（平成13年10月から）
臨時職員（調査補助員）	時安　順子（平成13年７月～９月）
嘱託職員（事　　務）	仲田　亜矢子

◆ 松江市埋蔵文化財業務フローチャート



第2章　発掘調査

平成13年度の発掘調査事業は下記のとおりである（表１）。そのうち13年度内で報告書が刊行されたのが奥山古墳群発掘調査事業である。また山津窯跡・法吉遺跡・田和山遺跡群は平成14年度も継続して発掘調査が行われる。大坪遺跡・荒隈城跡（小十太郎地区）は平成14年度に報告書を刊行予定である。

奥山古墳群は総合運動公園のテニスコート増設造成工事に伴う調査である。調査の結果、７基の古墳が確認され、うち６基の発掘調査を行い、古墳時代中期頃の古墳ではないかと考えられる１基は現状保存)。出土遺物は土師器・鉄剣・鉄鏃などである。

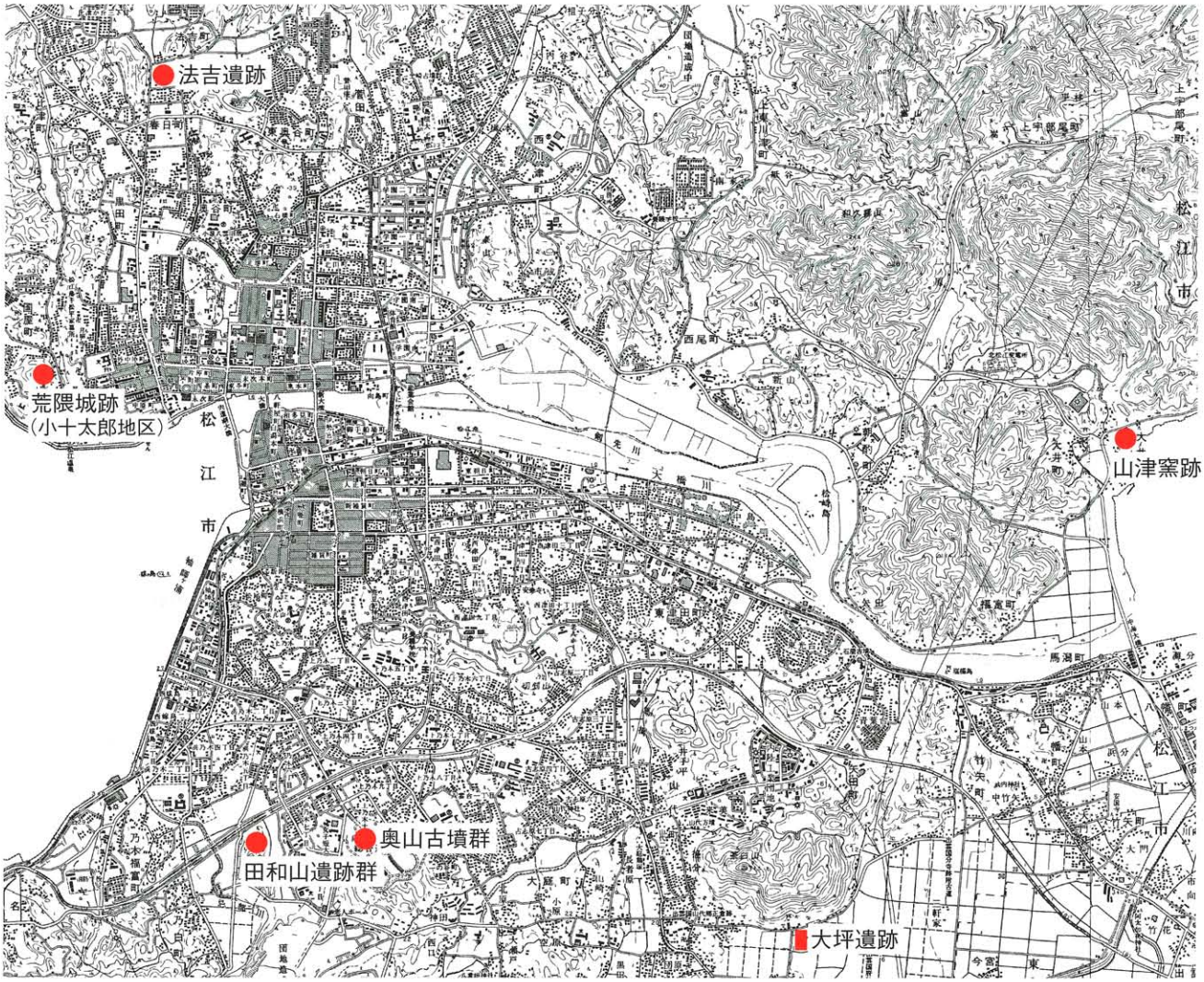
大坪遺跡は平成11年度から継続して行われた調査で、市道真名井線整備に伴うもので、真名井神社の参道に関係する橋脚状の柱根と弥生時代後期の溝状遺構が検出された。また弥生時代後期・古墳時代後期の土器をはじめ奈良時代の木棺が出土した。今年度は自然河道が検出され、古墳時代中期から後期にかけての土器をはじめ、木製品も出土した。

荒隈城（小十太郎地区）は民間業者による住宅団地造成工事に伴う調査で、中世荒隈城に関連した遺構があると思われた。しかしながら荒隈城に関係するものは確認されず、代わりに近世以降の遺構が検出された。また近世末から近代にかけての大量の陶磁器・土師質土器の破片が出土し、古銭（寛永通寶）も出土した。当時の生活を知る上で貴重な資料である。

法吉遺跡は市道春日東生馬線整備に伴う調査で、平成12年度から継続して行われ、平成14年度まで行われる予定である。今年度は土壙や杭列が検出され、弥生時代から10世紀までの土器が出土し、田下駄や木錘などの木製品も出土した。

山津窯跡は道路の改良工事に伴う調査で、試掘調査の結果、遺物包含層が確認された。本年度は山津窯跡推定地から西200～300m西側の水田を調査した。調査の結果、土壙や溝状遺構、旧河道などが検出され、古墳時代から奈良時代にかけての遺物が出土した。また土馬や耳環も出土した。

田和山遺跡群は市民病院建設に伴う調査で、平成９年度に始まり、平成14年度まで継続して行われる予定である。本年度までに３重の環壕や弥生時代・古墳時代の集落や中世の住居址が確認され、大量の弥生土器・土師器・須恵器をはじめ、石器・石鏃・つぶて石・銅剣を模した石剣が出土している。本年度は南丘陵の東西両斜面の調査を行った。建物跡や土壙や石棺、自然流水路跡などが検出された。遺物は古墳時代後期の土器をはじめ、中世土器や近代の陶磁器も出土した。



発掘調査位置図（1／50000）

平成13年度　埋蔵文化財発掘調査事業一覧表

NO.	遺 跡 名	遺跡の種類	調査原因	調 査 地	調査担当者
1	奥 山 古 墳 群	古墳	土地造成	上乃木町	瀬古・広江
2	大　坪　遺　跡	散布地	道路整備	山代町・大草町	江川
3	荒　隈　城　跡 (小十太郎地区)	城跡ほか	土地造成	国屋町	石川
4	法　吉　遺　跡	散布地	道路整備	法吉町	藤原
5	山　津　窯　跡	窯跡散布地	道路整備	大井町	藤原・広濱
6	田和山遺跡群	集落ほか	土地造成	乃白町	落合

奥山古墳群

奥山古墳群は、松江市上乃木10丁目の松江総合運動公園内に所在する。

調査地は運動公園内の北西に位置し、標高25m～35mの低丘陵が南北長約200mに渡り連なっている。ここは以前より「運動公園内古墳群」として周知されており、松江市教育委員会の試掘調査で9箇所の古墳推定地が確認されていた。

調査は最南端の1箇所を除く8箇所が、平成16年度に島根県を主会場に開催される全国高校総体に対応するためのテニスコート増設工事の範囲内に含まれることに伴い、平成12年12月4日から平成13年3月31日、平成13年4月9日から同年6月25日の期間実施したものである。

調査の結果、調査区南端に位置する標高30m余りの尾根上では南端より1号墳、2号墳を、調査区中央に位置する標高35mの尾根上では南端より3号墳、ＳＸ－０１を検出した。さらに北に降り標高31.5mに4号墳を、標高28mに5号墳を、標高25mの尾根の先端に6号墳を検出した。このうち比較的依存状態の良かった1号墳、3号墳、5号墳は、出土遺物の年代観からいずれも古墳時代中期後半の築造と推測された。主体部が確認できたのは1号墳、2号墳、3号墳、5号墳の4基であった。いずれも木棺直葬と思われる。

以下に概要を記すこととする。

奥山1号墳は南北長6.4m、東西長推定5.6m、残存高0.5mの方墳であった。

墳丘は南北に上端幅1.4mの溝を掘り、尾根を切断し区画していた。

墓壙は長さ1.9m、幅約0.5m、深さ0.1mの長方形土壙であった。墳丘中央に旧表土面から掘り込まれており、主軸はＮ－44°－Ｗにとる。土層堆積状況より埋葬後、黄褐色土の盛土を施していることが確認されたが、盛土はかなり流失したものと見られ厚さ0.1m～0.2m程度であった。

墓壙内からの遺物は出土していないが、北側溝の墳丘寄りで5世紀後半代の土師器の坏3個体を出土した。いずれも口径10㎝前後、器高5㎝前後を測り、口縁の内湾する特徴が著しく、底～体部が丸みを帯びるものであった。坏は溝底にほぼ接し、3個体が並び置かれた状態で出土しており、埋葬時に溝内で葬送の祭祀が執り行われたことが窺われるものであった。

奥山2号墳は1号墳よりやや高まりを持ち、北側の標高差約3mと見晴らしの良い目立つ立地に築かれていた。盛土の流失により墳形は不明である。南裾はわずかにそれとわかる程度の起伏をなしており、北裾は降り尾根の地山を削平して幅4.5m、長さ2.0mの三日月状のテラスを造っていた。

墓壙は長さ2.6m、幅0.6m、深さ0.26mの長方形土壙であった。頂部地山面より掘り込まれており、主軸はＮ－30°－Ｗにとる。

出土遺物はなく時期は判断できないが、立地条件から1号墳より先に築かれたものと考えるのが自然ではないだろうか。

奥山3号墳は直径8.3m、高さ0.9mの円墳であった。墳丘の北側に溝を掘り南側を墓域として区画していた。

墳丘は旧表土面を直径7.5mの範囲で残し周囲を地山面まで削り込んで墳裾としていた。さらに削

り出た地山粘質土を旧表土上に盛り土し墳丘基盤としていた。埋葬後、若干の盛土を施していた。墓壙はこの盛り土上より掘り込まれ、築造当初は長さ2.2m以下、幅0.85m、深さ0.2mの長方形土壙であったと思われるが、北側半分は最大幅1.2m、深さ0.25mに渡り盗掘によるものか撹乱を受け埋め戻された痕跡が確認された。主軸はN－12°－Wにとる。

遺物は土壙検出面より数cm掘り下げたところで鉄剣１口、鉄鏃２本を出土した。鉄鏃の１本は鏃身

奥山古墳群遺構配置図

長３㎝前後の片刃箭式の長頸式鏃であり５世紀後半代のものと考えられる。これらの遺物は供献品と思われ、棺側に置かれたものが木棺の腐朽とともに落ち込んだものと考えられる。

ＳＸ―０１は残存長2.15m、残存幅0.35m、深さ0.1mを測る隅丸長方形の土壙であった。表土直下の地山から掘り込まれており、主軸をＮ－11°－Ｗにとる。３号墳と並ぶ最高所に立地していることから墓壙の可能性が高いと思われる。

奥山４号墳は直径7.5mの小円墳であった。墳丘南側に地山を切削加工した上端幅1.4m～1.7m、下端幅0.45m、深さ約0.3mの溝を検出した。溝の断面形は緩やかなＵ字形を呈し、両端は円弧状に少し回っていた。盛土、主体部、遺物とも確認できなかった為詳細は不明である。

奥山５号墳は南北長推定12mの方墳であったと思われる。墳丘の南側は、上端幅4.5m、下端幅2.8mの溝で尾根を切断し区画していた。東、北、西側は築造当初よりあまり手を加えず、見晴らしの良い自然地形を充分に活用したものと考えられた。

墳丘は頂部平坦面の旧表土を削り、地山面に粘性の黄橙色土を盛り土して平坦面を整形し墳丘基盤としていた。埋葬後は、類似する黄橙色土を盛り土し更に黄褐色土を盛り土したと思われる。

墓壙は墳丘基盤を整形した盛土上より掘り込まれ、長さ3.6m、幅約2.0m、深さ0.5mを測る二段掘りの長方形土壙であった。主軸はＮ－27°－Ｗにとる。内側の掘り込みは、長さ3.0m、幅約0.6m、深さ0.15mを測る。墓壙底部南側には枕石と思われる15㎝～20㎝程の石２個がＬ字状に組み合された状態で置かれており、頭位が南東に向けられていたことが推測された。

遺物は墓壙底面より鉄剣１口、鉄鏃１本、刀子１口、不明鉄器１個を、底部より20㎝上層の墓壙内埋土より５世紀後半代の土師器の直口壺を１個体出土した。直口壺は埋葬後の供献土器と思われる。

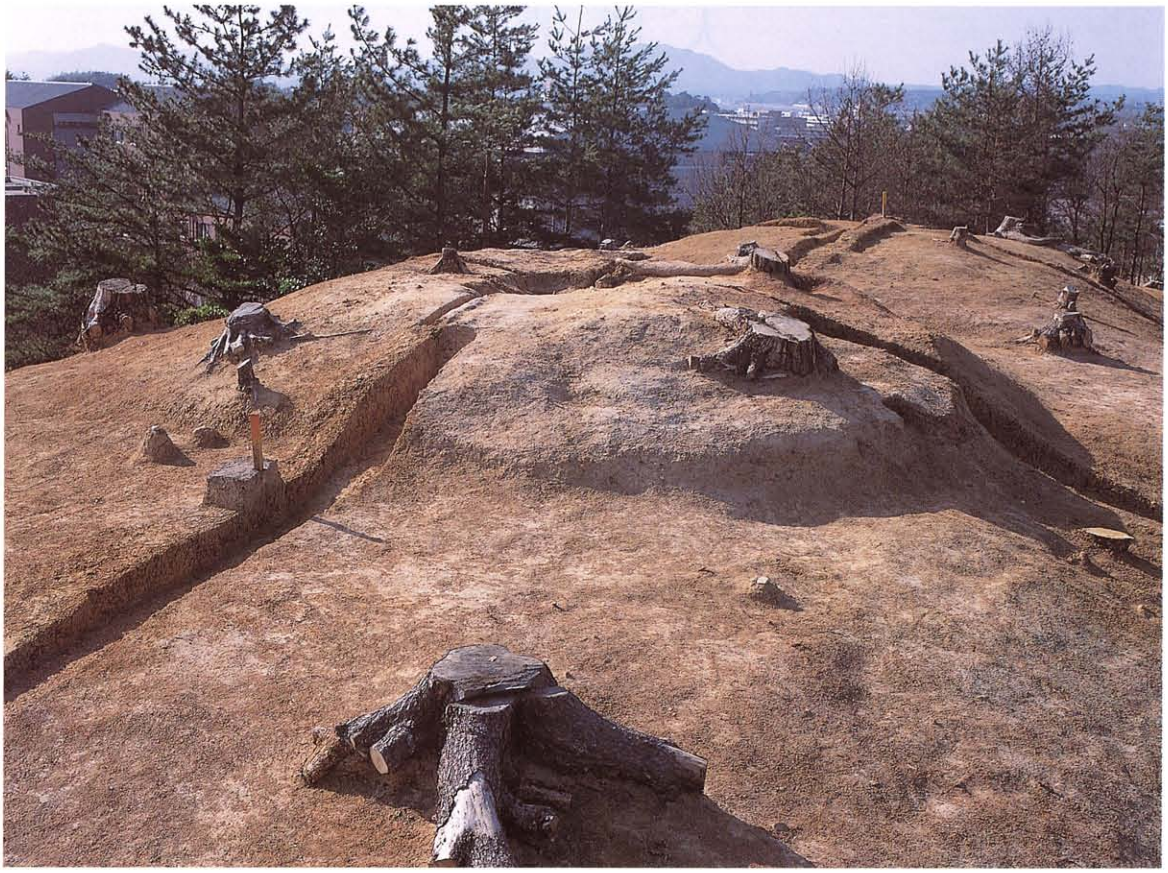
６号墳は運動公園造成以前より既に墳丘の北側半分以上が削平されており、残丘部分のみの調査となった。そのため墳形は確かな判断がつかず、主体部も破壊されたものか確認できなかった。

土層堆積状況より古墳の盛土と思われる厚さ10㎝～20㎝程の黄褐色土が、東西径約11.0mに渡り旧表土直上に観察された。

墳裾は、北側に長さ5.2m、最大幅2.8mを測る半月状のテラスを造り、南側には上端幅4.5m、下端幅1.5m～2.4m、深さ約0.6mの溝を切っていた。

本古墳群周辺の遺跡には、県内でも傑出した規模の前方後円墳を持つ大角山古墳群や豊富な副葬品を有していた長砂古墳群など時代はやや古いが中期古墳の存在が明らかとなっている。本古墳群はこれらと比較すると墳丘規模、副葬品、供献品の質的、量的な観点から質素な趣を感じさせるものであった。おそらく本古墳群を形成する集団は、当地を掌握する豪族集団と主従関係にあり、農耕などを生産基盤として生活し累代的に営まれた小規模な地域集団であったのではないだろうか。そして運動公園造成以前の測量図によると、本古墳群の西側には、かなり広い谷の低地が広がっており、ここに生活基盤があったのではないかと想定された。今後、乃木地区における古墳時代中期の墓制の変遷が解明されるとともに、本古墳群を形成した人々の様相がより明らかになることを期待したい。

（広江　光洋）



奥山３号墳

奥山５号墳二段堀りの墓壙

大 坪 遺 跡

大坪遺跡は、松江市山代町・大草町に所在する。

そこは松江市東部の意宇平野の西寄りの場所で、現在は水田として利用されている。調査区は真名井神社参道に沿って幅約12m、長さ約337mと南北に細長く、意宇平野西部をほぼ南北に断つ位置である。

発掘調査は平成11年度、12年度と実施しており、本年度が３年目である。

本年度の調査区は細長い大坪遺跡の中でも真名井神社寄りの８m×42mで、降雨が続くと溜池状となる水捌けが悪い低湿地である。平成12年度調査においては、遺構・遺物等が存在する可能性が低いと考えられたため、トレンチ調査を実施して土層観察のみにとどめる場所であった。ところが、トレンチ調査や一部拡張調査区において、灰白色粘土の古い基盤層や木製品の出土が確認されたため、全面発掘調査が必要となり、本年度の調査に至ったものである。

発掘調査の結果、調査区のほぼ中央では、意宇川の扇状地形成が始まる以前の基盤層、灰白色粘土層を南北16m幅にわたって確認した。灰白色粘土層の上面には所々に薄い砂層が見られたほか、葦類の植物遺体が多量に検出され、湿地となっていた様子がうかがわれた。古墳時代中期から後期を中心とする土器のほか、火キリ臼を含む木製品も多く出土した。精査をおこなったところ、幅の狭い小川状の自然河道２条を検出し、その堆積土中からは石鏃のほか土師器の高坏片等の遺物が出土した。最

調査区全景（北より）

灰白色粘土基盤層上の遺物出土状況

も新しい遺物としては古墳時代後期の須恵器、坏蓋が出土したことから、古墳時代後期には流れていたものと解釈できよう。

灰白色粘土基盤層の北端は河道によって浸食を受けており、地表面下2.5m掘り下げたレベルでは、人力ではとても動かせないような巨大な木の幹や根が絡み合った状態で出土した。周縁の巨大流木をも巻き込んで押し流した激しい河川の氾濫があったようである。そのような激流によって白色粘土の基盤層北端は浸食されたのであろう。巨大流木の下面砂礫層中からは弥生時代中期の土器がまとまって出土したほか、木製品も多く出土した。

灰白色粘土基盤層の南端も河道によって浸食を受けており、セクションでその様子を確認することができた。扇状地の扇端にあたるため、北側の旧河道と比べて地下からの湧水が著しく、掘り下げの深さは湧水砂層直上までとせざるをえなかった。湧水砂層上の沼地状堆積層、暗灰色粘質土層中からは弥生時代中期の土器や木製品が出土したが、その出土地点は灰白色粘土基盤層に近い場所に限られた。

以上のとおり、平成13年度の調査では遺構は検出されなかったが、意宇平野の扇状地形成以前の基盤層を確認し、それが浸食された状況や時期をセクションや出土遺物から推察することができた。今後、意宇平野とその周辺に存在する遺跡を語るうえで役立つ成果があったと考える。

（江川　幸子）

荒隈城跡（小十太郎地区）

荒隈城（小十太郎地区）は松江市国屋町に位置する。本地区は民間業者が住宅団地の造成工事を計画した際に、丘陵斜面に複数の加工段と頂上部に比較的広い平坦面があることが確認された。本地区の南側丘陵には荒隈城があり、本地区もその一部と思われた。

荒隈城は1562年（永禄５年）に安芸国（現在の広島県北部）の戦国大名毛利元就が出雲国の戦国大名尼子氏を攻めるための本陣として築かれた城である。毛利氏の配下の武将は丘陵づたいに陣屋を築いたとされ、その痕跡は所々見受けられる。しかしながら毛利氏による尼子攻めが終わると荒隈城は廃城となり、その後は江戸時代になって堀尾吉春が出雲に入国し本拠地を月山富田城から松江に移す際に候補地として挙げられただけであった。

荒隈城自体の発掘は1968年に島根県文化財愛護協会（報告書未刊）が、1980～81年に松江市教育委員会（1982年に報告書刊行）がそれぞれ行った。その際に掘立柱建物跡や曲輪跡が検出され、土師質土器（かわらけ）や輸入陶磁器などが出土している。

12年度の調査は荒隈城の中心とされる丘陵より約400mの北にある丘陵が小十太郎地区と呼ばれるところである。本地区では墓域と想定される東側調査区、屋敷跡と思われる北側調査区、城跡の痕跡が残っていると思われる頂上部調査区の３ヵ所に分けて調査を行った。

東側調査区は調査前の段階で平坦面に塚状に盛り上がったところが数ヵ所あった。調査区から外れたところには天保年間銘や享保年間銘の刻まれた墓石があり、本調査区もその墓域の一部ではないかと考えられた。調査の結果、墓壙を持つ塚を２基検出し、うち１基の墓壙から出土した遺物で近世末前後の遺構と考えられる。調査区内から近世末以降の陶磁器や土師質土器の破片が大量に出土した。

北側調査区は70～80年くらい前までは人が住んでいたらしく、調査前に井戸が３基確認されていた。調査の結果、南北約20m、東西約10mの平坦面から溝や土壙、石列などが検出した。溝は斜面と平坦面との境に作られ、区画を示したり、雨落溝の役目を持っていたと思われる。土壙は円形や隅丸方形の形状で10穴を検出した。なかには貝殻や炭といっしょに陶磁器や土師質土器の破片が出土する土壙もあり、ごみ穴として使用されていたと考えられる。石列ははっきりとした用途は不明だが屋敷に用いられたものと推測される。

屋敷跡についてははっきりと規模を示すような痕跡は確認できなかったが、礎石に使用したと思われる石がいくつか見られたことから、礎石建物であった可能性がある。本調査区も近世末から近代にかけての陶磁器や土師質土器の破片が大量に出土している。

頂上部調査区は予想されていた頂上部平坦面からは遺構は検出できなかった。畑等の耕作によって破壊・撹乱されていた。丘陵斜面東側からは等高線に沿うような形で加工段を上下２段検出し、それに伴う溝も検出した。おそらくは雨落溝の役目があったと思われる。土壙は３基検出しれ、うち１基は“こ炭焼き”の土壙であった。これらの遺構に時期に関しては、埋土からの出土遺物により近世末から近代に埋没したもので、作られた時期もそのぐらいの時期と思われる。

遺構については中世荒隈城に関係するものは確認できなかった。その代わりに近世の遺構が確認した。明確な確証はないが、もともと荒隈城に関係する遺構がありそれが近世の開発によって破壊されたのではないか想像される。

遺物についてその大半が近世末から近代にかけてのものである。傾向として北側調査区では生活雑器がそのほとんどで、東側調査区ではその中に供膳具が含まれる。そして頂上部調査区になると出土遺物が他の２調査区に比べて極端に少なくなる。

今回出土した遺物は一般庶民が使っていたものであり、近世末から近代にかけての当時の生活を知る上で貴重な資料であることは間違いない。

（石川　　崇）

頂上部調査区　加工段状遺構

法吉遺跡

調査経緯

法吉遺跡は松江市法吉町・春日町地内に位置する。13年度調査地は前年度調査に引き続き、市道東生馬線の道路拡張部の438m²にあたる。この調査区をＩ区とＪ区に分けて順次、調査を行うことにした。

調査方法は前年度の調査方法に準じた。すなわち、各調査区は法面を40度に設定し掘削を行うが、包含層までは重機で掘削し、包含層は人力で掘削する。これは、遺跡地の地盤が極めて軟弱であり、調査上での安全を確保するための必要から生じたものである。

調査概要

調査区内の基本層序は盛土及び旧耕土がＧＬ－１ｍまで続き、同層からは近現代の陶磁器類が数点出土した。この層の下には暗灰色系のシルト層（有機質含）が堆積する。包含層の厚みは調査地点によって10㎝～50㎝と幅が広く、更に３～５層に細分できる。出土土器は５世紀～10世紀まで混在するが、上層では７～10世紀の土器が主体を占めている感じを受けた。この包含層において面的調査を実施（上面）した所、若干の土壙と杭列を検出した。

上面の下、ＧＬ－1.5～2.5mで黒色有機質層や灰色粘土層が堆積する。同包含層は木製品（田下駄等）の残存が良好で、遺物も弥生～10世紀と幅が広い。そのため、木製品の明確な時期比定は困難であるが、出土土器に関していえば古墳末～古代の土器が量的に最も多く、木製品も大部分が同時期に属すると判断している。

木製品出土状況

ＧＬ－2.5m以下は灰色・オレンジ色砂層の堆積が認められた。出土遺物はない。砂層の薄い部

分では、ＧＬ－３ｍ付近でオレンジ色シルトの地山層を確認したが、調査の安全を考慮して３ｍ以上の掘削は断念し、全面にわたっては地山を検出できなかった。

調査成果

13年度調査地の出土遺物は細片が多いが、土器以外の木製品で貴重な知見が得られた。これはＩ区とＪ区にまたがる沼状湿地（有機質シルト～粘質土）を中心として出土しており、器種的に田下駄、木錘、斎串？などを確認した他、多数の板状木製品を含んでいる。

遺構面では弥生（以前）～10世紀において立木や自然木が堆積する沼状湿地が拡がっていたことが明らかになった。『風土記』の島根郡の条には、「法吉（ほほき）の坡（つつみ）。周（めぐ）り五里(2.7㎞)、深さ七尺（さかばかり）許（2.1m）。鴛鴦（をし）・鳧（たかべ）・鴨・鮒・須我毛（すがも）有り。夏の節（をり）に当たりて、尤（もと）も美（うま）き菜（な）有り。」との記述が見え（荻原千鶴1999『出雲国風土記』講談社）、現在の黒田・法吉・春日一帯には古代において大きな池が拡がり、カモやオシドリなど水鳥が群がっていた状況が描かれている。本年度の調査成果によれば、当地が軟弱な低湿地の一部であったことは明らかである。

この沼状低湿地から打製石鏃、弥生土器片、磨製石器、黒曜石・サヌカイト剥片類が僅かながら出土している。５～６世紀の土師器・須恵器も一定量出土し、７～８世紀の須恵器が比較的多い。最も新しいものは９～10世紀の底部糸切による須恵器が出土した。これらの状況から、本年度の沼状湿地は古く弥生（以前）に遡り、古墳末～８世紀には遺物が多量に放棄され、以後10世紀頃に最終的に埋没したものと考えることができる。

Ｊ区の上面では中・近世の杭列が検出されており、層位的にはその上に近・現代の灰色旧耕土、及び盛土が堆積する。そのため、沼状湿地が埋没した10世紀以後は水田として利用され現在に及んでいるものと判断できる。

（藤原　　哲）

Ｊ区下層　沼状湿地検出状況

山 津 窯 跡

山津窯跡は、松江市大井町に所在する。

県道本庄福富松江線大海崎工区（大井）道路改良工事に伴い、松江市教育委員会が試掘調査を行った結果、遺物包含層が確認された為、本調査を実施することとなった。

13年度は、山津窯跡とされる場所から200～300m西側の水田部分の調査を行った。調査地は、旧地形上では和久羅山、嵩山から派生する谷地形に立地している。中海北岸に点在する古扇状地で、谷部から平野に出た部分、すなわち旧河道では上流部に当たる所だと考えられる。

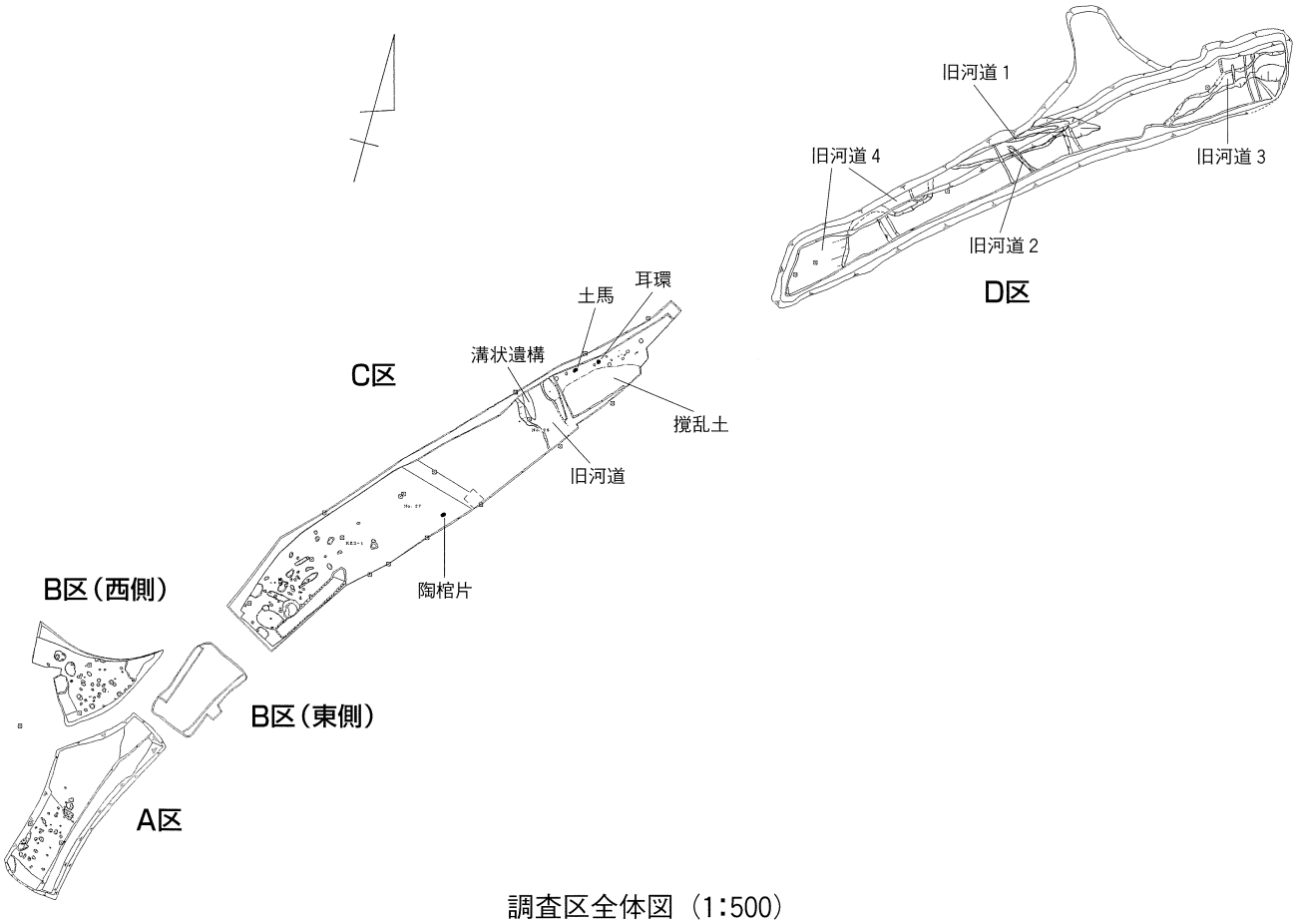
調査区を西から順にA・B（東、西）・C・D区に分けて調査を実施した。

A区からは、土壙２基、数10穴のピットを検出した。これらの遺構内からは、土師器のカマド、土製支脚、須恵器の坏蓋片、高台付の坏など古墳時代中期から奈良時代にかけての遺物が出土した。

B区（東側）は、耕地整理の際削平を受けており遺構は検出されなかった。

B区（西側）からは、数10穴のピットを検出した。これらのピットの基盤層には、古墳時代から奈良時代の遺物を含んでおり、奈良時代以降の遺構であると思われる。

C区からは、ピット群、土壙２基、溝状遺構、旧河道跡を検出した。ピット群、土壙２基からは高坏、坏蓋、甕片など古墳時代中期から奈良・平安時代にかけての遺物が出土したが、これらの基盤層からは陶磁器片、陶棺片も出土している。この陶棺片は昭和62年度に行われた池ノ奥C遺跡の特殊土



調査区全体図（1:500）

器（A—1類）の円陶棺の蓋に接合した。

溝状遺構、旧河道跡からは、古墳時代中期の遺物が出土した。旧河道跡の遺物は山陰Ⅰ期の甕など古墳時代中期に限られている事からその頃に埋まったものと考えられる。その他C区からは、中世の須恵器、土馬、耳環などが出土している。

D区からは、旧河道跡を4本検出した。いずれも深さ50cm未満の浅い河道跡であった。これらの河道跡からは古墳時代中期から奈良・平安時代にかけての遺物が出土した。

今回の調査区は谷部から平野に出た部分の古扇状地で、地山にかかる古扇状地の堆積だと思われる。その堆積土層を削るように河道（網状流路）が形成され、その上にまた土層が堆積したものである。A～C区では多数のピットを検出したが、このような扇状地に一時的な掘立小屋でも建てていたのであろうか？

遺物については、土師器は古墳時代前期からあり、中期の物が大半をしめるが、須恵器は山陰Ⅰ期～奈良、平安時代まであり、山陰Ⅲ期がほとんどで次に奈良時代のものが多かった。これらは本遺跡近くの池ノ奥C・D遺跡、イガラビ遺跡他の遺跡の遺物とほとんど同時期であった。土砂の流出に伴って、周辺の遺跡の遺物が運ばれたものであろう。出土遺物の中には、焼き損じた物、土器と土器が溶着した物、スサの混入した窯壁（窯体）も出土している。今回の調査区の周辺には、池ノ奥、迫谷、寺尾の窯跡が存在するが、より近接した場所に未発見の窯跡が存在するのではなかろうか。

（廣濱　貴子）

D区　旧河道跡

田和山遺跡群

田和山遺跡群は、松江市乃白町地内の小高い丘陵地に位置する、弥生前期末～中期・古墳前期～奈良・平安時代の遺構が確認された遺跡群である。平成12年度には本遺跡群の主となる弥生前期末～中期の環壕遺跡が国指定遺跡として現状保存されることが決定している。

発掘調査は、平成９年度からほぼ継続しておこなっており、早くも今年で５年目を迎えることになったものである。

本年度は、本遺跡群南方の南丘陵の西斜面と東斜面について本格調査をおこない、建物跡・石棺墓・遺物が出土する自然流路を検出している。

南丘陵の西斜面

本調査区は、弥生環壕遺跡から南に派生する丘陵の西斜面裾に位置し、斜面が急激に平坦面へと変化する地形を成しているところである。

調査の結果、平坦面で重複する建物跡３棟と柱穴、平坦面から西へ下る斜面でテラス状遺構、西側の平坦面で建物跡１棟と土壙１穴と柱穴を検出した。

重複する建物跡３棟はいずれも溝・壁帯が調査区外である南へ続いており、その全容を明らかにすることはできなかったが、古墳時代後期の土器片が出土していることから、この時期に作られ始めた建物跡と推測されるものである。テラス状遺構は、いわゆるテラス状に加工された平坦面をもつ段状の遺構である。この遺構は、斜面下方に向かって遺構面が流失していたため、その全容は不明ではあったが、埋土中の出土土器から古墳時代後期の遺構である可能性が高いと判断されるものである。西側の平坦面状で検出した建物跡は、溝とこれに平行する柱穴２穴を持つものである。この建物跡の東側は駐車場として削平されおり、どのくらいの規模を持つ建物であったのかは不明であった。また、埋土中からの遺物は、土師器・須恵器・中世土器・明治以降の陶磁器が混在して出土しており、その存在時期においても不明であった。土壙及び柱穴は、この建物跡の遺構面と同一基盤から掘られているもので、同状況であったため存在時期等、詳細は不明であった。

南丘陵の東斜面

本調査区は、弥生環壕遺跡から南に派生する丘陵の東斜面に位置し、平成９・12年度において調査したＡ遺跡の東側の斜面上方にあたるところである。

調査の結果、重複する建物跡３棟・柱穴・こ炭焼跡１穴・土壙２穴・石棺墓・遺物を含む自然流水路跡２条を検出した。

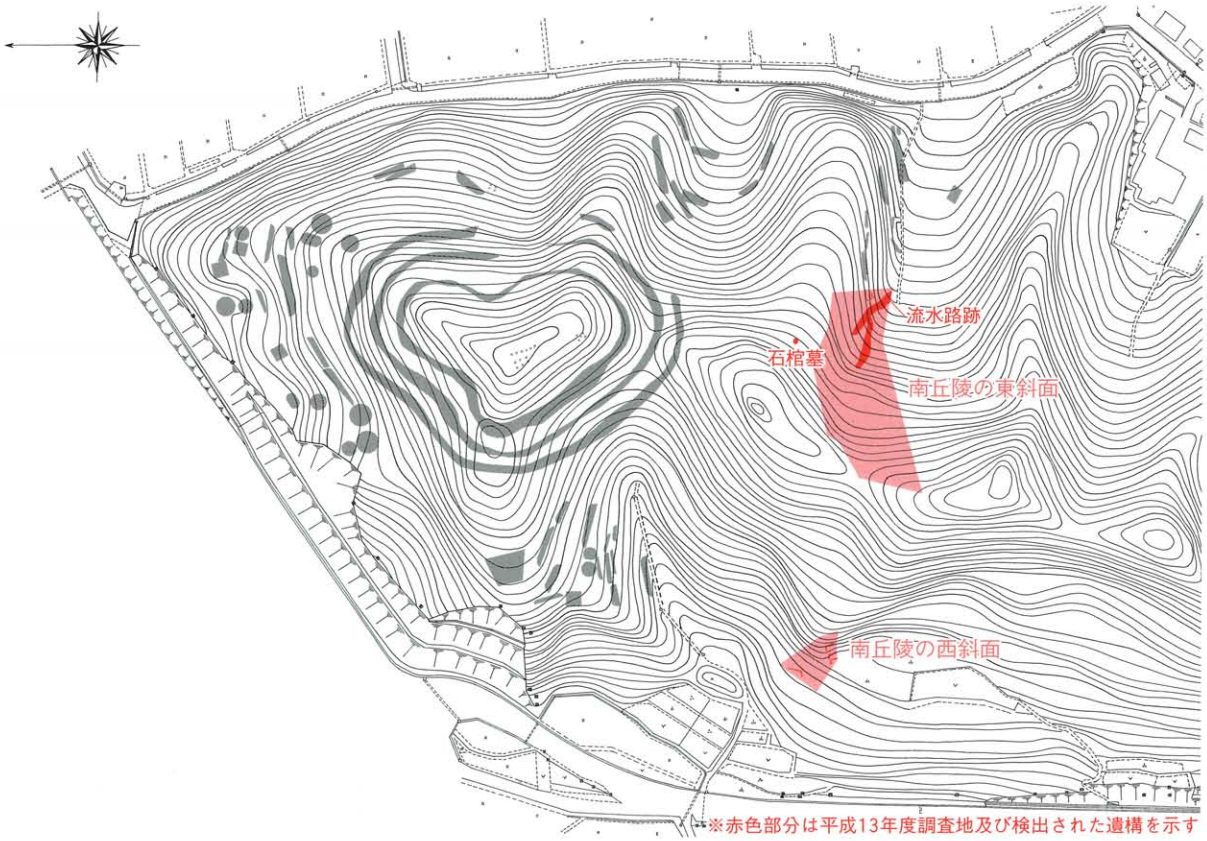
重複する建物跡は、壁帯溝または溝を伴うもので、平成12年度の調査で検出した掘立柱建物跡と同じ平坦加工面に存在するものである。建物の規模は、東側の遺構面が地滑りによって消失していたため不明ではあるが、平成12年度の調査で確認した掘立柱建物跡と同様な建物跡が存在していたものと推測される。遺物は、甑、土師器片、古墳後期の須恵器の高坏・坏蓋片が出土している。柱穴は、重複する建物跡の西側において４穴検出している。この内３穴は直線状に並ぶものであったが、建物跡となり得るものであるのか、詳細は不明なものであった。こ炭焼跡は、自家消費用の簡素な炭窯とさ

れるもので、古墳時代から近世まで活用されているものである。存在時期は遺物が出土しなかったため不明なものである。石棺墓は、小児用とも思われる小形のもので、尾根の頂部から少し下った斜面上にて石材が露出する状態で確認したものである。単独で存在し、且つ尾根頂部ではなく斜面上に作っている等、不明な点が多いものである。なお、存在時期は遺物が出土しなかったため不明である。自然流水路跡は、調査区中央付近からＡ遺跡の谷部まで続く、湧水によって作られたものである。この流水路からの遺構は検出していないが、埋土中から弥生前期末～中期初頭の壷・甕片、黒曜石の石鏃、古墳中期の土師器、古墳後期の須恵器、平安時代の甕片が出土している。

まとめ

南丘陵の西斜面の調査では、予想以上の多くの遺構を確認することができたが、遺構面の一部消失や遺構が調査区外へ続いていくことなどから、その全容が掴めなかったことは一部残念な結果であった。しかし、この区域に遺構が存在することが判ったことは、田和山遺跡群の時代ごとの動きを考えるにあたって重要なものとなったと考えられるものである。また、南丘陵の東斜面においては、南丘陵で始めて弥生土器が出土したことが今回の調査において、最大の成果であったものと考えられる。結果的には、これに伴う遺構は確認されなかったが、この土器出土は少なくとも弥生環壕遺跡の最古の段階である弥生前期末に、この南丘陵で人々の動きがあったことが推測されるものである。

（落合　昭久）



田和山遺跡群遺構位置図（１／2500）

自然流水路跡

石棺墓

何が出るかな～

うぉ～なんだこれはー

さぁー掘るぞ！掘るぞ！

第３章　平成13年度以前の調査

年度	遺跡名	所在地	遺跡の概要	報告書
H・5	釜代１号墳ほか (寺津11号墳) (北小原３号穴)	西浜佐陀町	前期古墳。主体部２基確認。第２主体部は粘土槨を伴う長大な割竹型木棺で、水銀朱・鏡・玉類出土。第１主体部は現状保存。寺津11号墳は中期の方墳。北小原３号穴は現状保存	1994刊
H・5	菅沢谷横穴群	乃白町	６世紀後半～７世紀前半の12穴の横穴墓群。うち３穴から９体の古人骨出土。	1994刊
H・5	向遺跡	国屋町	奈良～平安期の集落跡検出。	1994刊
H・5	論田４号墳	西津田町	(課設立以前の調査報告書作成事業) 古墳時代後期の円墳。S60に調査された論田横穴墓群の調査成果も掲載。	1994刊
H・5	柴尾遺跡	上東川津町	主体部を３基持つ前期古墳と縄文時代後期の黒曜石を中心とする石器生産遺跡。	1994刊
H・5	角森遺跡	八幡町	弥生後期～古墳時代にかけての遺物包含地。	1994刊
H・5	敷居谷古墳群	東生馬町	５世紀の方墳を含む計３基の方墳検出。後世の祭祀関連の遺物も出土。	1994刊
H・5	出雲国分寺跡	竹矢町	完形で良質な瓦ばかりの瓦溜り検出。	1995刊
H・5	深田遺跡	大庭町	奈良～平安期の道路状遺構と円形土壙列を検出。	
H・5	岩汐峠遺跡ほか	大井町	一字一石経石を含む礫石経塚検出。	1999刊
H・5	出雲国府跡	大草町	直接国府に関連する遺構は検出されなかった。	
H・5	勝負谷遺跡	大庭町	さいの神と積石塚、古代と考えられる道路状遺構を検出。	
H・5	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物包含層のみで遺構は検出されなかった。	1999刊
H・6	柴尾遺跡ほか (柴尾古墳群)	上東川津町	縄文土器を伴う石器生産遺跡。前期古墳１基で主体部（割竹型木棺）から翡翠製曲玉・鉄鏃出土。中期以降の古墳が１基	1995刊
H・6	敷居谷古墳群	東生馬町	中期末の方墳１基。後期初頭の方墳の主体部から太刀・刀子各１点出土	1995刊
H・6	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物包含層のみで遺構は検出されなかった。	1999刊
H・6	米坂遺跡	西尾町	古墳時代中期から後期初頭の掘立柱建物跡群検出。	1999刊
H・6	舟津横穴群	薦津町	横穴墓２穴と近世貯蔵穴３穴を検出。	1995刊
H・6	筆ノ尾横穴群	東長江町	６世紀後半～７世紀中頃の６穴の横穴墓群。１穴に６体埋葬の横穴墓あり。	1995刊
H・6	寺の前遺跡	山代町	自然流路から、布目瓦、陶製鴟尾、円面硯、輸入・国産陶磁器の破片が出土。	1995刊
H・6	黒田畦遺跡	大庭町	奈良時代の土壙内から墨書土器・製塩土器・律令様式の土器が出土し、役所関連の遺跡が近辺にあったことを示す。中世末期の土壙墓６基検出。	1995刊
H・6	二名留遺跡	乃木福富町	古墳時代と近世の遺物包含地	1995刊
H・6	向山１号墳	大庭町	トレンチ調査で未盗掘の石棺式石室発見。	1996刊 (概報)
H・7	向山古墳群	大庭町	32×20m以上の方墳。墳裾から子持壺出土。石棺式石室内の副葬品は掻き出されており、前庭から馬具・武器類・玉・須恵器の細片が出土。	1998刊
H・7	遅倉横穴群	朝酌町	６世紀後半を中心に７世紀前半まで続く計５穴の横穴墓。山陰地方初現期タイプの横穴墓検出。	1999刊
H・7	松江北東部遺跡	上本庄町	遺物数片が出土したのみで、遺構は検出されなかった。	1999刊
H・7	宮尾古墳群ほか (柴尾遺跡) (柴尾古墓)	西川津町 上東川津町	石器や石鏃のほか、室町後期～安土桃山時代の五輪塔２基のほか、11基の土壙群を検出。	1996刊

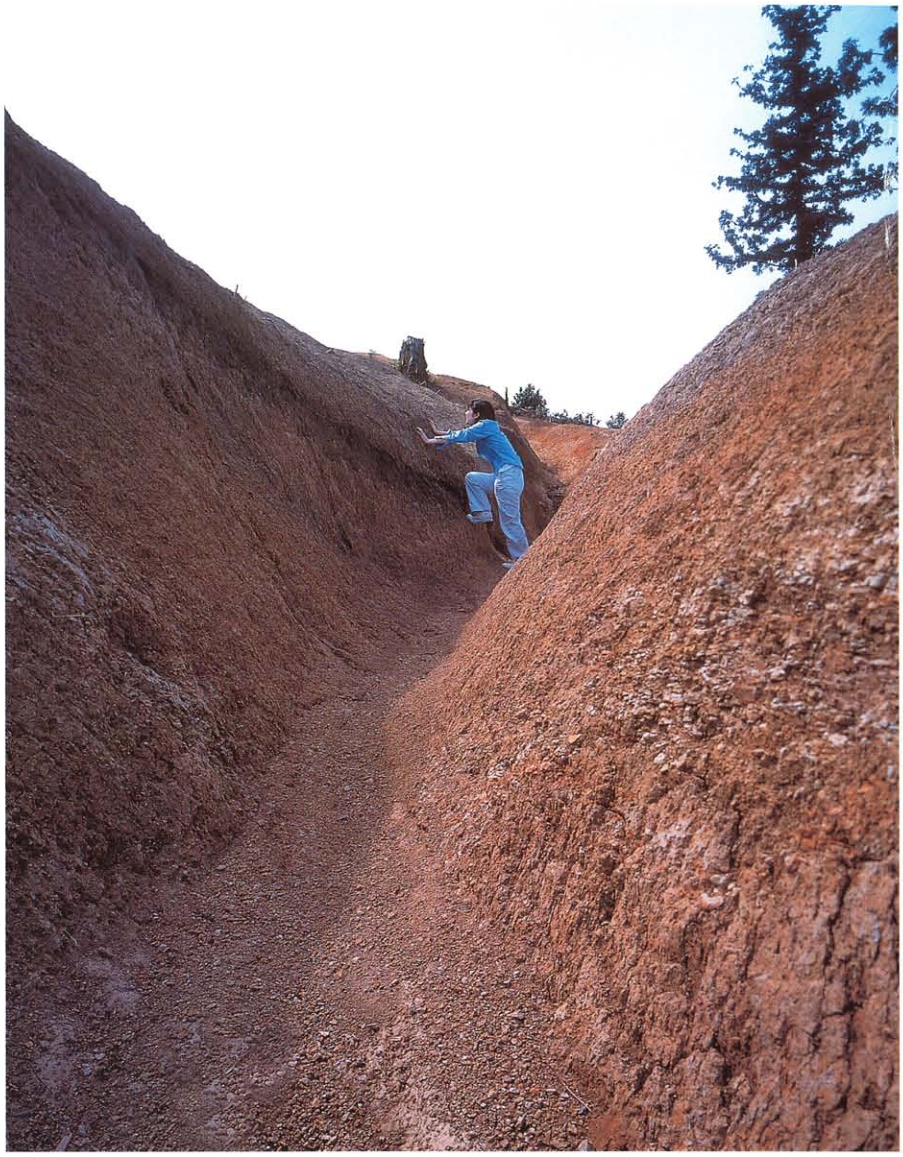
H・7	袋尻遺跡群	乃白町 (現平成町)	竪穴住居7棟、土壙5基、後期古墳2基、近世墓2基などを検出。	1998刊
H・7	四王寺跡	山代町	調査範囲が狭く、四王寺との関連性を判断することができなかった。	1996刊
H・7	大久保遺跡	乃白町	焼土壙、ピットを検出。遺物は数点出土したのみ。	1996刊
H・7	川原後谷横穴群	川原町	墓道の一部のみ調査。	1996刊
H・7	寺山小田遺跡	矢田町	古墳時代中～後期の集落跡検出。2棟の建物内から玉類出土。	1996刊
H・8	小無田Ⅱ遺跡	山代町	山代郷南新造院（四王寺）の瓦を焼いた8世紀代の瓦窯跡3基を検出。2基は現状保存。	1997刊
H・8	米坂古墳群	西尾町	古墳時代中期～後期の方墳7基と墳丘を持たない埋葬施設8基を検出。	1999刊
H・8	柴Ⅲ遺跡	西川津町	弥生時代終末期の玉造工房跡を含む竪穴式住居跡を3棟、掘立柱建物跡12棟、柱穴列3条等を検出	1997刊
H・8	袋尻遺跡群	平成町	17ヶ所の調査で、古墳6基、竪穴式住居1棟、掘立柱建物跡1棟、溝状遺構3条、土壙3基、横穴墓3穴、古墓群を検出。	1998刊
H・8	松江北東部遺跡	上本庄町	竪穴式住居、掘立柱建物跡、祭祀遺構などを検出。遺物も子持勾玉のほか、大量の土師質土器片が出土。	1999刊
H・9	大佐遺跡群	西持田町	弥生時代終末～古墳時代初頭の墳丘墓を含めた計8基埋葬施設、土器棺が2基、及び戦国時代の真山城塞群の一部を検出。	1999刊
H・9	米坂古墳群 柴尾遺跡	西尾町	古墳時代中期～後期の方墳群。柴尾遺跡は遺構・遺物は確認されなかった。	1999刊
H・9	松江北東部遺跡 (荒船遺跡)	上本庄町	縄文時代の有舌尖頭器のほか、中世の掘立柱建物2棟、井戸状遺構1基を検出。	1999刊
H・9	田和山遺跡群	乃白町	弥生時代前期～中期の3重の環壕を検出。山頂からは柵列と掘立柱建物、古墳時代の墓壙を検出。石斧・石鏃のほかに銅剣を模した石剣も出土。	2003予
H・10	夫手遺跡	手角町	縄文～古墳時代。長海川河口に洪水による包含層が形成。漆液の付着した小型の鉢、木製の櫂などは約6000年前のもので、全国でも最古級に属する。	2000刊
H・11	久米遺跡群	比津町	6世紀～8世紀の集落。竪穴式住居1棟、掘立柱建物11棟検出。甕・甑・竈などが多数出土。	2000刊
H・11	門田遺跡	乃木福富町	弥生時代中期の自然流路、溝、土壙、柱穴、杭列などを検出。付近の田和山遺跡との関連で注目される。	2000刊
H・11	大坪遺跡	山代町 大草町	溝と小ピットを検出。弥生・中世の土器片と「恐々謹解…」とかかれた木棺が出土。	2002予
H・10 H・11	田和山遺跡群	乃白町	環壕外側の斜面より、弥生中期・古墳中期・平安～中世の竪穴式住居跡、掘立柱手建物跡、加工段（掘立柱建物跡？）を検出。	2003予
H・12	北小原古墳群	西浜佐陀町	石棺2基検出（うち1基が現状保存）。石棺内部から小型仿製鏡は出土し、墳裾から土器棺2基検出。	2000刊
H・12	田中谷遺跡Ⅲ区	法吉町	掘立柱建物跡と自然河道を検出。遺物は弥生時代後期の土器が中心で、木製品も出土。	2001刊
H・12	雲垣遺跡	乃白町	弥生時代中期を中心とした遺物包含地。土器のほか、田下駄などの木製品、木鏃も出土。	2001刊
H・12	大坪遺跡	山代町 大草町	溝と小ピットを検出。弥生・中世の土器片と「恐々謹解…」とかかれた木棺が出土。	2002予
H・12	法吉遺跡	法吉町	自然流路からドングリ集積遺構を検出。縄文土器の細片や黒曜石が出土。	2002予
H・12	舎人遺跡	国屋町 黒田町	城跡に結びつく遺構は確認されなかった。近世以降の遺物が出土。	2002予

埋蔵文化財課年報Ⅵ

2002年11月

発　行　　財団法人
松江市教育文化振興事業団

印　刷　　有限会社　高　浜　印　刷
松江市東長江町902－57



田和山遺跡群　環壕写真
（撮影：牛嶋　茂氏）